

【特別寄稿】

新たな日伯関係への期待感

駐日ブラジル大使
マルコス・ベゼーバ・
アボツチ・ガウヴォン

Marcos Bezerra Abbott Galvão



投資する企業に関しても、投資分野に関しても、ブラジルに向かう日本側資本の多様化がみられる。この傾向は有利な為替相場および豊富な保有資金量を活用した国際的な事業買収を通じて、海外市場獲得を目指す日本企業の外向き志向を反映している。

日本を含む海外の投資家は、近年の社会・経済的な発展を通じて現実のものとなったブラジルの新たな状況を認識しつつある。ブラジルにおけるビジネスチャンスは、国内市場の成長、新たな需要に対応するために必要なインフラストラクチャー、巨大な超深海油田の発見、サッカーの世界カップ（二〇一四年）およびオリンピック（二〇一六年）の巨大スポーツイベント等に刺激され、一層拡大している。

このような状況のもとで考えられる不確定要素は、先進国が直面する経済的な課題の深刻さの度合いとその解決に要する時間、さらには国際経済のアンバランスなどが指摘されよう。いかなる国も、国際的な経済システム全体がもたらすさまざまな影響から逃れられないが、ブラジルは安定化政策と慎重な財政管理により二〇〇八年のいわゆるリーマン・ショックを比較的軽傷で乗り切った。しかしながら、国が望む発展の段階と社会的な充実を実現するためには、まだ長い道のりが残されている。そして、そのために、ブラジルは、多様なパートナーの積極的な協力を必要とする。

ブラジルと日本の経済関係は両国の社会経済情勢や世界経済の変化のなかで、近年、活発化しつつあり、日本の企業家や投資家による広範囲な分野でのビジネスが展開されている。こうした両国間の良好な関係は今後も継続すると期待している。

伝統的に貴重なパートナー

少なくとも二十世紀の後半以来、日本はブラジルにとって貴重なパートナーとなっている。戦後、両国はともに急速な社会・経済的な発展を経験し、このことは双方の経済の補完性を顕在化させ、相互作用を深化させた。歴史的に日本は工業化と都市化の基盤となる資源をブラジルに求め、日本からの投資と技術移転は製鉄、自動車、紙パルプ、アルミ等の分野においてブラジルの発展を促した。

経済的なパートナーシップ以外にも両国は緊密な協力関係の伝統を有している。これは特に一九七〇年代において顕著であり、その代表例はセラード地域での農業開発計画であった。この共同事業は、ブラジル農業の新たなフロンティアを切り拓き、ブラジルを世界有数の食糧生産国の地位に押し上げた。より最近の事例をあげれば、両国間の協力によって日本のデジタル地上波テレビジョン放送方式に基づいたブラジル方式が生まれ、これは南米のほぼ全域に普及している。

近年における互いの重要性の再認識

両国間の経済関係は、これまでも決してその重要

新たなビジネスチャンスの拡大

両国間の絆の緊密化を

日本とブラジルの絆を緊密化することは、両国政府が目指す共通の目標である。今年四月に日本を訪れたアントニオ・パトリオタ外務大臣は、松本剛明外務大臣（当時）との会談において両国関係の強化に共同で取り組む旨を提案し、ブラジル訪問を要請した。松本外務大臣は、六月二十九日にパラグアイのアスンシオン市で開催したメルコスール（南米南部共同市場）首脳会議に参加した後、招待に応じてブラジルを訪れ、両国間の対話を深める日本側の熱意を示した。

八月下旬、私は両国間の経済交流に関する二つの主要な舞台である第五回通商投資振興会議（M D I C I M E T I 会議）および第一四回日本ブラジル経済合同委員会（経団連・ブラジル全国工業連盟共催）に参加する機会に恵まれた。後者の会議は広範囲なアジェンダと多数の参加者によって特に盛況であった。

両国経済は多くの補完的な特徴を備えており、この補完性はブラジル経済の発展によって一層顕著になりつつある。両国間の関係は、今後ともさらに深化し、拡大し続けるものと確信する。何よりも、両国を結びつける人的な絆と、双方の接近を互いに望む意思が決定的な要素となろう。駐日大使として日本の社会、政府当局および実業界の皆様と接し、わが国に対する強い関心と親しみを感している。このような感情はブラジル側でも全く同様である。相互に好感を持っていることは、両国が目指す共通の目的を達するに当たって絶好の要素である。

（日本語にて寄稿）